

日時 10月27日(木) 13:30~16:45

テーマ 高等学校における特別支援教育①

講師 明星大学講師 中田 正敏 氏



第10回公開講座は、舞鶴支援学校トータルサポートセンターと共催で行いました。府立・私立高等学校、特別支援学校、子ども療育センターから30名が参加しました。

今回の講師は明星大学で講師をされている中田正敏先生です。中田先生は、神奈川県立田奈高等学校の校長先生をされた後、文部科学省中央教育審議会他の委員を務められています。また、かながわ生徒・若者支援センターの代表でもあります。

講義では、まず、特別支援教育が「主体的な取り組みを支援するという視点」に立ち行うものだと強調されました。生徒を支援する「対象」ではなく、「主体」としてとらえる考え方の転換が必要です。また、学校は生徒や保護者からの相談への対応が可能なように、組織体制を整備しなければならないことも説明されました。生徒を取り巻く状況は複雑で、生徒は様々な困難を抱えているため、先生一人一人の個人的な対応ではなく、組織的・システマ的な対応が必要だと述べられました。



演習では、仕事に問題を抱えるXさんを指導しなければならない立場のYさんに、自分ならどうアドバイスするかという設定で、5~6名のグループで話し合いをしました。Yさんとのやりとりのセリフを考えることで、相手の立場を常に考えながら支援をすることや、支援には対話が重要だということ学びました。この演習を通して、合理的配慮には対話が不可欠であり、対話を増やすことで生徒への支援に関わる組織体制を充実させることが大切だと実感できました。

#### <参加者アンケートより 感想(一部抜粋)>

- 高校ではこれまでの経験をたよりに対応するだけではなく、新たなレパートリーを増やして校内全体で方法を考えなくてはいけないということに納得した。
- 対話のない組織では合理的配慮は難しいということが大変印象に残った。
- 演習でいろんな人の考え方を聞くことやそれをまとめることの大変さなど多くの学びがあった。
- 担任及び教科担当で生徒を多角的にとらえて関わっていかれたらと思った。
- 「困った子」から「困っている子」に転換することで一緒に取り組める「私たち」が広がり、障壁が消える、という感覚が、自分の組織に置き換えて考えてとても納得できた。「あの子ども困っているんだ」と共感できることから、その子へのよりよい支援が始まると思った。

第11回は11月12日(土)に「障害のある子どもの家族・きょうだい支援」をテーマに、京都市児童福祉センターの医師田中一史氏を迎えて実施します。12月16日(金)は「高等学校における特別支援教育②」と題して、中田正敏先生に高等学校での具体的な支援事例を交えてお話しいただきます。奮って御参加ください。